

平成 25 年度（2013 年度）セタシジミ資源概況調査

石崎 大介・幡野 真隆

1. 目 的

近年、セタシジミの漁獲量は 100 トンを下回っており、セタシジミ資源の現状とその動向を把握し、適正な資源管理や効果的な栽培漁業推進を行う必要がある。その基礎資料を得るため、1997 年から産卵期前にあたる 5～7 月に実際の漁具を用いて調査を行っている。

2. 方 法

2013 年 5 月 28、29、31 日に琵琶湖北湖のセタシジミ主要 7 漁場（表 1※）を含む 16 漁場において、実際のシジミ漁業で用いられる貝桁網（開口幅約 140 cm、網目 3 cm）を用いて調査した。本年は水産試験場の調査船琵琶湖丸を用いて、GPS 記録から過去に漁業者に依頼した調査地点と同一箇所で開催した。各漁場において 1 分間ないし 2 分間曳網し、採捕したセタシジミの個体数、重量、殻長を記録した。そして、GPS の軌跡記録から曳網面積を求め、単位面積あたりの採捕量を計算し、生息密度とした。主要 7 漁場については 3 回曳網し平均生息密度を算出した。

3. 結 果

主要漁場以外の生息密度は高島、近江舞子の漁場でそれぞれ 6.52、3.60 個体/㎡と高く、菖蒲、石寺の漁場ではそれぞれ 0.03、0.08 個体/㎡と低かった（表 1）。針江、鴨川の漁場で大きく減少し、高島漁場は増加したが、その他は 2012 年と同傾向であった。主要漁場の生息密度は平均 0.69 個体/㎡であり 2012 年より大きく減少した（図 1）。特に殻長 18mm 以上の平均生息密度は 0.17 個体/㎡となっている。松原、今西の漁場で生息密度が多少増加したが、それ以外の漁場は大きく減少し、特に磯漁場では 2012 年の 3.64 個体/㎡から

0.09 個体/㎡と減少した（図 2）。資源は変動を繰り返している可能性があるが、資源が減少した時に漁獲圧が過剰となることは、今後の資源回復に影響を与えることが予想されることから、資源管理の取り組みを継続するとともに、今後の資源状況に注意が必要である。

表 1 各調査地点におけるシジミの生息密度(主要漁場は平均)

地点	個体数	曳網面積(㎡)	密度(個体/㎡)
菖蒲	5	153	0.03
牧	13	81	0.16
沖島南西※	49	96	0.50
沖島西※	68	119	0.57
沖島東※	29	129	0.23
新海	29	115	0.25
石寺	15	187	0.08
松原※	47	106	0.44
磯※	8	95	0.09
長浜※	45	114	0.40
今西※	348	136	2.59
海津	62	98	0.63
針江	84	88	0.96
鴨川	40	138	0.29
高島	723	111	6.52
近江舞子	456	127	3.60
平均			1.08

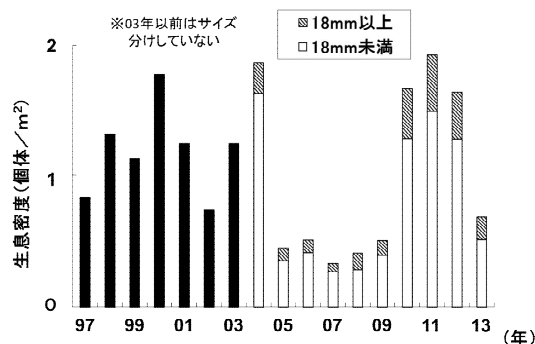


図1 主要漁場における生息密度の推移

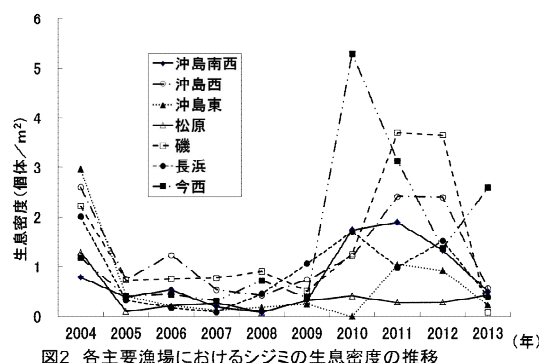


図2 各主要漁場におけるシジミの生息密度の推移

本報告は滋賀県資源管理協議会からの調査委託事業の中で行われた成果の一部である。